

沖縄県立久米島高校

地域と連携した学校づくり

「選ばれる学校」を目指し、  
学校と地域が一丸となつて  
魅力ある教育活動を実現

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 地域の人口減少の影響により、入学者の定員割れが常態化する中、久米島町教育委員会、議会、商工会などの有志と学校が連携し、同校の魅力化を図る改革に着手

### 実践内容

- **魅力ある授業づくりの推進** 地域と連携し、魅力ある授業づくりに力を入れた。その1つとして、生徒の視野を広げ、進路意識を醸成できるよう、地域についての探究学習「まちづくりプロジェクト」やインターンシップなどを推進
- **「離島留学」の実施** 島外の中学校から同校への入学者を募集する「離島留学」を実施。離島留学生は、町営寮に住んだり、久米島町内の住民の家庭にホームステイをしたりしながら同校に通う
- **町営塾「久米島学習センター」との連携** 町営塾と連携した教科指導や進路指導などを展開し、生徒一人ひとりへのきめ細かな指導を強化

### 成果と展望

- 生徒の地域への関心が深まった
- 同校の魅力が伝わり、離島留学生が増加

島内外からの入学者を増やすため、  
魅力ある学校づくりを図る

普通科と園芸科から成る沖縄県立久米島高校は、沖縄本島から西へ約100kmの場所に位置する久米島で唯一の高校だ。久米島は、海岸にサンゴ礁が生息するなど、豊かな自然に恵まれていることもあり、毎年多くの観光客が訪れる。一方、島内の少子高齢化や人口減少は深刻化しており、同校では入学者の定員割れが続くようになった。そうした中、2009年度には、同県教育委員会から、募集定員を縮小するための、園芸科の廃科が提案された。「園芸科がなくなれば、地域の衰退に拍車がかかってしまう」と、当時の同校の教師たちは大きな危機感を持った

## PROFILE



沖縄県立糸満高校久米島分校として設立。校訓に「剛健進取・忍耐持久・自律協和・誠実勤勉」を掲げ、地域社会に貢献できる人材を育成できるよう、豊かな人格の完成と個性に応じた能力の伸張を重視した教育活動を行っている。

設立 1946(昭和21)年

形態 全日制/普通科・園芸科/共学

生徒数 1学年約70人

2019年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、和歌山大、琉球大、名桜大に3人が合格。私立大は、玉川大、早稲田大、関西外国語大などに延べ22人が合格。短大、専門学校進学30人。就職22人。

住所 〒901-3121 沖縄県島尻郡久米島町字嘉手苅727

電話 098-985-2233

Web site <http://www.kumejima-h.open.ed.jp>

と、園芸科で農場長の宮城栄先生は言う。

「久米島では、サトウキビや菊などの栽培が盛んで、地域経済の中軸に位置づけられています。そうした中、本校の園芸科は、地域の農業を支える人材を育成する役割を果たしてきました。園芸科がなくなれば、地域の基幹産業の担い手が思うように育たなくなり、島のさらなる衰退を招くと考えられます」

また、園芸科は、以前から地域に親しまれる取り組みを多く行ってきた。毎年10月に開催さ



沖縄県立久米島高校校長  
**石原 啓** いしはら・あきら

教職歴31年。同校に赴任して1年目。「互いの違いを認め、尊重し合えることが『格好よい』ことだと、生徒に気づかせたい」



沖縄県立久米島高校  
**宮城 栄** みやぎ・さかえ

教職歴19年。同校に赴任して3年目。農場長。「実習を通して知識や技術を身につけさせ、社会で通用する生徒を育てたい」



沖縄県立久米島高校  
**西銘 伸悟** にしめ・しんご

教職歴7年。同校に赴任して2年目。離島留学担当。「『師弟同行』。生徒と苦楽をともにし、生徒の成長を最大限支援していきたい」



沖縄県立久米島高校  
**大工 廻朝陽** たくえ・あさひ

教職歴5年。同校に赴任して2年目。「総合的な学習の時間」担当。「生徒たちの能力を最大限に引き出せる教師でありたい」



久米島学習センター塾長  
**新井 直樹** あらい・なおき

文系科目、小論文、推薦入試指導を担当。「深い対話を通して、生徒も自分も成長していくのが教育」

れる「久米島マラソン」のコース沿道に、園芸科の生徒たちが育てた花を飾ったり、校内で栽培した野菜などの販売を実施したりしているのは、その代表例だ。地域産業へのデメリットに加え、そうした取り組みへの支持もあり、地域で廃科反対の署名活動が行われた結果、廃科案は保留となった。

園芸科が廃科の危機に直面したことをきっかけに、同町の教育委員会や議会、商工会などの有志から成る「久米島高校の魅力化と発展を考える会」が発足。同会と連携した学校改革に着手したと、石原啓校長は語る。

「私は1989年度から3年間、教諭として本校に勤務していました。当時は5クラスを設置した学年もありましたが、現在は生徒数が減り、各学年で3クラスしか編成できない状況です。島内外から入学者を増やし、学校に以前のような活気を取り戻せるよう、地域と力を合わせ、魅力的な学校づくりを推進したいと考えました」

## 生徒の地域への関心を高める 「まちづくりプロジェクト」

同校の改革には、3つの柱がある。

1つめの柱は、魅力ある授業づくりだ。その一環として、週1回ずつの「総合的な学習の時間」とLHRでは、3年間を通して生徒の視野を広げるとともに、進路意識を醸成する取り組みを行っている。

まず、1年次から2年次の1学期までは、探究学習「まちづくりプロジェクト」を通して、地域の課題と向き合わせる。そして、2年次の2・3学期には、地域企業へのインターンシップに加え、農家や観光協会など、地域の特色ある産業分野で活躍している人たちが自らの職業のやりがいを語る「久米島キラ人講話」などを行い、将来を具体的な職業と結びつけて考えさせ、3年次には、大学入試対策や就職対策など、生徒の希望進路に応じた指導に力を注ぐ。「総合的な学習の時間」担当の大工廻朝陽先生は、取り組みのねらいをこう説明する。

「島内の小・中学校では、久米島についての調べ学習を行っています。そこで学んだ知識を活用し、地元への理解をさらに深められるよう、1年次には地域についての探究学習を行うことにしました。そして、2年次からは、地域の課題と向き合った経験を生かして地域の産業や経済などへと関心を広げ、生徒が社会で自分のやりたいことを考えられるよう、段階的なカリキュラムを策定しました」

「まちづくりプロジェクト」では、生徒が数人ずつのグループになり、人口減少や産業の乏しき、観光業振興の必要性といった同島の課題の中から、自分たちが探究したいテーマを設定。地域でのアンケート調査やインタビューなどを通して、問題の解決策を練り上げていく。

「探究学習に取り組む中で、生徒は地域の現状を改めて見つめ、自分たちにできる地域



写真「まちづくりプロジェクト」では、何のために、どこで、どのような調査をするか、すべて生徒が話し合っ  
て決める。久米島の特色を明確に意識できるよう、地域  
住民だけではなく、観光客らにもインタビューを行  
うグループもある。

貢献を考えます(写真)。地域の課題を自分事  
として捉えられるようになれば、地域への愛  
着も深まり、地域を支えようとする意欲につ  
ながると考えています(大工廻先生)

探究内容を発表する機会も定期的に設け、1  
年次2月の中間発表会では学年全体、2年次7  
月の最終発表会では全校生徒に対して、地域の  
問題解決策についてのプレゼンテーションを行  
う。最終発表会では、同町の町長や教育長らを  
審査員として迎え、1グループに優秀賞を贈る。  
18年度には、地域振興策として、地元の伝統工  
芸品である久米島紬(\*1)を用いたスマート  
フォンのケースの製作・販売を提案したグル  
ープが同賞に輝いた。

今後は、他地域との交流も視野に入れていく。  
その1つとして、19年度の優秀賞を獲得したグ  
ループを「全国高校生マイプロジェクトスタ

トアップキャンペーン(\*2)に派遣する予定だ。

「他地域で行われている地方創生の取り組  
みを知ること、生徒は刺激を受け、地域  
への関心をより深めるでしょう。そうした  
生徒が増えていけば、『まちづくりプロジェ  
クト』はさらに充実していくと期待していま  
す」(石原校長)

### 離島留学生から刺激を受け、 学びを深める生徒たち

2つめの柱は、島外の中学校から同校への入  
学生を募集する「離島留学」だ。生徒数を増や  
したいと、2013年度に始めた。離島留学生  
の選考では、同町役場の職員による書類審査や  
面接により十数人に絞られた後、同校の入学試  
験(一般入試)を行う。現在では、東北地方や  
関東地方といった様々な地域から数十人の応募  
があり、毎年10人前後が合格している。大工廻  
先生は、離島留学生を迎える意義をこう話す。

「島内出身の生徒は、幼少期から人間関係  
がほぼ固定されているため、ものの見方や  
考え方が単一になりやすい傾向があります。  
しかし、全国から集まった離島留学生ととも  
に学ぶ中で、価値観の多様さに気づいていき  
ます。また、久米島に広がる自然や点在する  
遺跡は、島内出身の生徒にはあたり前のもの  
ですが、離島留学生は貴重なものだと感  
じます。それらに強い関心を示す離島留  
学生の姿を見ることをきっかけに、地域の魅力に目を

向けるようになる島内出身の生徒も少なくあ  
りません」

離島留学生は、町営寮「じんぶん館」(\*3)  
に住むか、町内にホームステイをする。親元を  
離れて生活しているためか、「自分のことは自  
分です」といった自立心を持つ生徒が多いと  
いう。東京都などで中学3年生を対象に実施し  
ている離島留学の説明会では、そうした留學生  
の生活を紹介していると、離島留学担当の西銘  
伸悟先生は述べる。

「説明会に参加した中学生と話していると、  
『自分は親元を離れてやっていると分かります』  
といった不安を抱えていることが分かります。  
また、寮での人間関係を心配する中学生  
も少なくありません。そこで、中学生が島で  
の生活を具体的にイメージできるように、離島  
留學生の卒業生を説明会に招き、寮やホーム  
ステイ先での経験を語ってもらっています」

### 町営塾とともに生徒を見守る体制を 確立し、きめ細かな指導を強化

3つめの柱は、「じんぶん館」に併設された  
町営塾「久米島学習センター」との連携だ。同  
センターには5人の専任講師が常駐し、離島留  
学生を含む同校の生徒を対象に、平日は毎日、  
授業の補習や定期考査対策、大学進学や就職対  
策などの個別指導を実施している。同校では、  
小規模校の強みを生かし、きめ細かな教科指導・  
進路指導を行っているが、同センターと力を合

\*1 15世紀に始まったとされる、久米島産の紬による織物。天然染料による染色や手織りなどの技術に、琉球王朝以来の伝統が受け継がれており、それらの技術は国の重要無形文化財に指定されている。

わせることで、そうした特色をさらに強めるねらいがある。例えば、具体的な進路についての検討が本格化する2年次後半からは、同校の進路指導部の教師や担任団と、同センターの専任講師全員が集まり、生徒一人ひとりについての指導方針を議論している。同センターの役割を、新井直樹塾長はこう語る。

「生徒には、一人ひとり違った強みがあります。それらを適切に把握し、伸ばしていくためには、なるべく多くの大人の目で生徒を見るのが欠かせません。そこで、指導してみていることは同校の先生方とこまめに共有しています。また、推薦・AO入試などで求められる志望理由書や小論文の添削指導には、時間がかかります。本センターの講師もそれらを担当することで、先生方の負担を減らすとともに、生徒へのフィードバックを充実させられると考えています」

講師がファシリテーターとなり、「あなたが理想とするかっこいい大人」など、様々なテーマについて生徒同士が議論する「ちゅらゼミ」も、月1回実施している。地域住民や島外の大学生らを特別講師として招き、議論に参加してもらうこともある。

「生徒の視野をより広げられるよう、多様な見方・考え方を知る場をつくりたいと考えました。そこで、『ちゅらゼミ』では、答えが1つではないテーマについて、生徒たちに考えさせています」(新井塾長)

生徒・卒業生が語る

久米島高校で得られた **成長実感**

普通科2年 **田場成海**さん

挑戦することの大切さを学んだ

私たちのグループは、「まちづくりプロジェクト」で、久米島の観光業をより活性化させる方策を探究しています。

課題を設定する時に、観光客や地元の方に「久米島のよさ」についての聞き取り調査を行ったところ、「のんびり過ごせる場所」という回答が多く得られました。そこで、その魅力を生かした観光のあり方をグループで検討した結果、自然の中でのんびり過ごすために行う「グランピング」によって観光客の誘致を図るというアイデアが出ました。

探究学習を通して、久米島に様々な仕事があることを知っただけではなく、資金の集め方などを自分たちの力で考えて実践したことで、久米島への理解がさらに深まり、自分の進路検討にも生きています。知らない人に聞き取り調査をするのは、とても緊張しましたが、新たなアイデアにつながるヒントを得ることができたので、やってよかったと思っています。勇気を出して挑戦することの大切さを学びました。

和歌山大学観光学部1年 **大澤こみち**さん(2018年度卒業生・離島留学生)

本当にやりたいことを見つけ、積極的になれた

東京都出身の私には、広い空や青い海があり、琉球王朝の古跡が豊富な久米島での生活は、感動の連続でした。そうした中、「久米島の素晴らしさを多くの人に伝えたい」という思いが次第に強くなっていったことをよく覚えています。

そこで、沖縄県による観光促進事業に参加し、沖縄本島からの観光客と島内を巡るツアー企画を立案しました。自分のお勧めスポットを盛り込みながらコースを決めるのが面白く、また、久米島の魅力をPRするお手伝いができるというやりがいも感じました。それがきっかけで、大学で観光学を学ぼうと考えるようになりました。

東京都で生活をしてきた中学時代までの私は、自分のやりたいことを見つけ、その実現に向けて積極的に動くようなタイプではありませんでした。そうした私が変わったのは、久米島で本当にやりたいことに出会えたからだと思っています。

生徒から選ばれ続ける学校づくりを  
今後とも推進していきたい

3つの柱による改革は、着実な成果を上げている。その1つが、生徒の変化だ。未知のことに挑戦をしたり、本当に進みたい道を選択したりする生徒が増えた(左コラム)。また、生徒の地域への関心も高まっているという。

「以前は、『島外に出た時に久米島について聞かれても、何も答えられなかった』と話す生徒が少なくありませんでした。しかし、現在の生徒たちは、それぞれが知っている久米

島のこと、抱いている久米島への思いを語れます」(大工廻先生)

離島留学の希望者の増加も、大きな成果だ。以前は数人だったが、前述した通り、現在は全国各地から数十人の応募がある。同校の魅力が発信できていることの表れであると言えよう。

今後について、石原校長はこう語る。

「地域と連携することで、本校には様々な教育活動を実現しやすい環境が整いつつあります。今後もしやそうした環境を生かし、多くの生徒に選ばれ続ける学校づくりに力を入れていきたいと考えています」

\* 2 認定特定非営利活動法人カタリバが全国の高校生を対象に実施している探究型学習プログラム「全国高校生マイプロジェクト」の活動の1つ。「マイプロジェクト」とは、自分の「こうあってほしい未来」を実現するための計画のこと。  
\* 3 「じんぶん」は、「知恵」という意味の沖縄方言。